

幼児の遊び環境と伝承遊びに関する保育系学生の認識と課題

穂丸 武臣

愛知みずほ大学短期大学部

Takeomi Akimaru

Aichi Mizuho Junior College

キーワード：幼児、遊び環境、伝承遊び、保育系学生

I 緒言

幼児の発育発達に関する問題提起は正木健雄（1979・1981）による「子どもの体は蝕まれている」や「乳幼児のからだーアンケート報告書」に始まったとあって差し支えない。全国の保育者による子どもの定点観測が行われようになった。そして保育者には子どもを正確に観察する力量が求められた。

筆者は生体を Von Bertalanffy(1978)の言うところの開放システムとしてとらえている。開放システムとしての生体は環境に対して開かれており、生体は環境からエネルギーと情報を入力し同化作用と異化作用によって成長を続ける。したがって、環境の状態が子どもの発育発達に大きな影響を与える。この視点からも子どもの定点観測は重要な意味を持っている。

愛知県では原田碩三（1982）が1969年より幼児の体格と運動能力測定を開始した。筆者（2011）はそれを引き継ぎ1989年から2009年まで10年間隔で測定調査を継続した。その結果、愛知県の幼児は外遊び時間の短縮や、運動能力の低下傾向が明らかになった。それらの現象は、幼児の遊び環境の変化が大きく関わっていることを推測させるものであった。また、日本学術会議合同子どもの成育環境分科会（2008、2011）は子どもの遊び環境改善のために様々な提言を行った。

現在では幼児の心身の発達を促すために最も重要な環境は保育所や幼稚園となっている。そこには遊び時間、遊び空間、遊び友達、遊びのリーダー（ガキ大将役）が存在し、保育計画に基づいた遊びの指導が行われている。

さらに、筆者ら（2007）は全国の保育者を対象に伝承遊び調査を行い、伝承遊びの実施状況や指導の課題などを報告した。保育者は伝承遊びを保育計画に組み込むことを望んでいた。保育者自身は伝承遊び指導の困難さも指摘し、その解決方策として伝承遊びに関する保育者研修の機会を増やすことや養成校においても伝

承遊びを指導するべきなどを要望に挙げた。

本研究は保育者の要望に応えるとともに保育者を目指す学生が幼児の遊び環境や伝承遊びについて、いかなる認識を持っているかを掌握し、保育者養成教育における教育プログラムの開発を行い、保育者としての力量形成に貢献することを目的とするものである。

II 研究方法

1. 調査対象者

愛知県内のA大学とB短期大学の保育者養成課程の1年生を対象にアンケート調査を実施した。分析対象者は男子学生35名、女子学生は95名、合計130名であった。

アンケート調査は2011年12月、幼児体育担当の教員に依頼し回収を行った。

2. アンケート調査内容

1) フェースシート項目

①所属大学名、②学年、③性別、④出身県、⑤就職希望先、⑥主な部活種目であった。

2) 子どもの遊び環境に関する認識質問項目

①子どもの外遊び時間、②子どもの遊び友達、③子どもの遊び場所、④子どもの遊びリーダーについて、⑤子どもの静的な遊び時間について。

3) 学生自身に関する質問項目

①伝承遊びの必要性、②伝承遊びの意義について、③伝承遊び体験時期、④伝承遊びの実施場所、⑤伝承遊びを習った人、⑥伝承遊び指導の自信、⑦子どもに伝えたい伝承遊びを3つ記入した。

4) 学生の伝承遊びについての認識

伝承遊びの実施状況（55項目）の記入方法は「3.遊んだことがある」「2.遊び方を知っている」「1.知らない」の中から該当番号に○を付した。

4) 統計的分析にはSPSS 16.0 Japaneseで行った。

Ⅲ 結果

1. 対象者のフェースシート部分について

1) 学生の出身県

愛知県出身の男子学生は24名(69%)、女子学生57名(60%)であった。三重県出身者の男子学生は皆無、女子学生は10名(11%)であった。岐阜県出身の男子学生は2名(6%)、女子学生11(12%)であった。静岡県出身の男子学生は4名(11%)、女子学生は7(7%)であった。他県出身者は男子学生が5名(14%)、女子学生は10名(10%)であった。したがって回答者の80%以上が東海地区の出身であった。

2) 学生の希望する職種について

学生の希望する職種について(複数回答を含む)男子学生、女子学生とも全員が保育士・幼稚園教諭を希望していた。

2. 学生の子どもの遊びに対する認識

1) 子どもの外遊び時間に関する認識

子どもの外遊び時間に対する学生の認識を図1に示した。学生の子どもの頃に比較して、子どもの外遊びが「やや減少した」「非常に減少した」と回答した男子学生は83%、女子学生は82%であった。学生は子どもたちの遊び時間が減少していると認識していた。

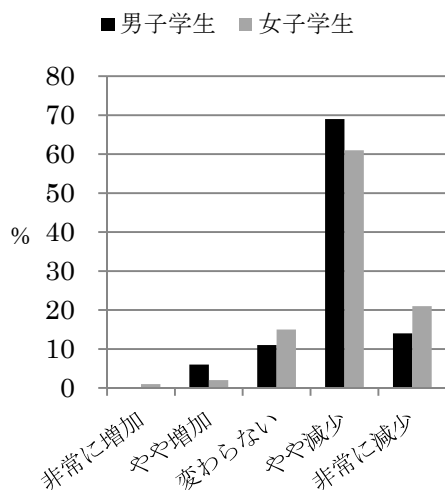


図1 外遊び時間に関する学生の認識

2) 子どもの遊び友達の数についての認識

子どもの遊び友達数に関する学生の認識について図2に示した。

学生の子どもの頃に比べて「変わらない」と回答したのは男子学生46%、女子学生は48%であった。また、「減少した」「やや減少した」を合わせると男子学生は

46%、女子学生は50%だった。したがって、学生は子どもの遊び友達の人数に関して、現在も「変わらない」あるいは「やや減少している」と認識していた。

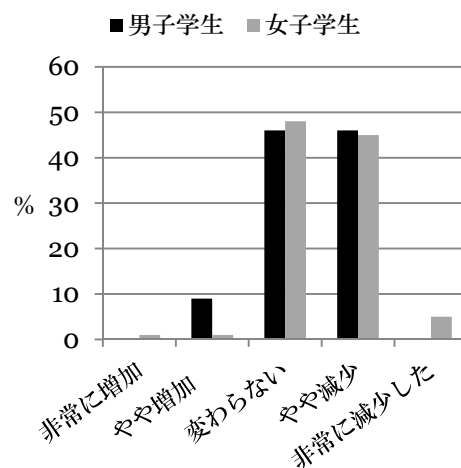


図2 遊び友達数に関する学生の認識

3) 子どもの遊び場所についての認識

子どもの遊び場に関する学生の認識を図3に示した。学生の子どもの頃に比べて遊び場所が「非常に減少した」「やや減少した」を合わせると男子学生と女子学生とも74%だった。「やや増加した」と回答した男子学生は6%、女子学生は8%であった。したがって、多くの学生は子どもの遊び場所について「やや減少している」と認識していた。

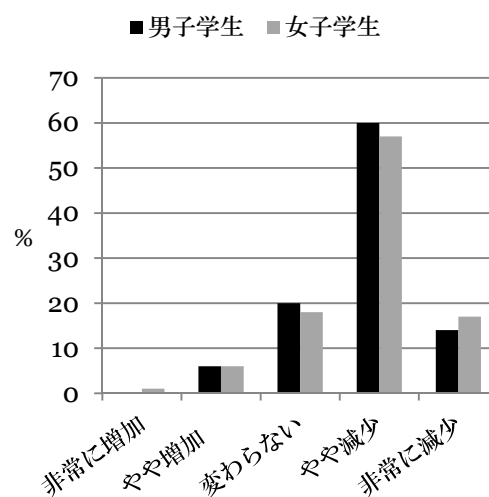


図3 子どもの遊び場に関する認識

4) 子どもの遊びリーダーについての認識

子どもの遊びにおけるリーダーに関する学生の認識について図4に示した。子どもの遊びのリーダー役が「非常に減少した」「やや減少した」を合わせると男子学生は約49%、女子学生は約58%だった。変わらないは男女学生とも40%であった。したがって、子どものリーダー的な存在については、やや減少傾向にあると認識していた。

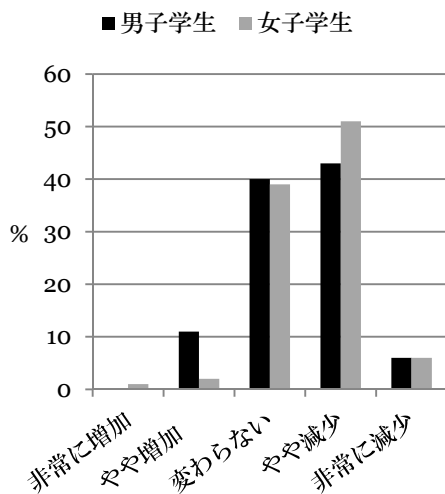


図4 子どもの遊びリーダーに関する学生の認識

5) 子どもの静的遊び時間に関する認識について

子どもの静的遊びに対する学生の認識を図5に示した。学生の子どもの頃に比べて「非常に増加した」「やや増加した」を合わせると男子学生で89%、女子学生で94%であり、ほとんどの学生が静的な遊び時間の増加を認識していた。

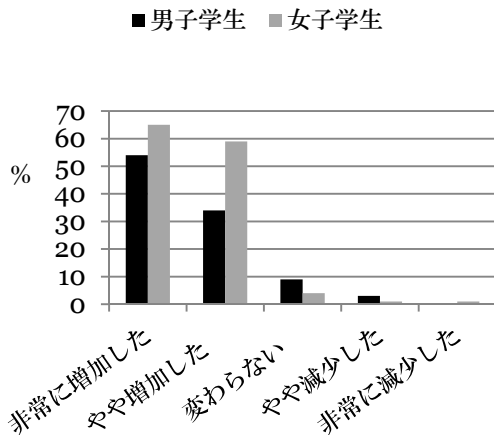


図5 子どもの静的遊び時間に関する学生の認識

2. 学生の伝承遊びの必要性に関する認識

1) 伝承遊びの必要性についての認識

子どもに伝承遊びの必要性に関する学生の認識を図6に示した。子どもたちにとって伝承遊びが「必要である」「やや必要である」を合わせると、男子学生は100%、女子学生は約99%だった。したがって、学生は子どもたちにとって伝承遊びは必要であると認識していた。

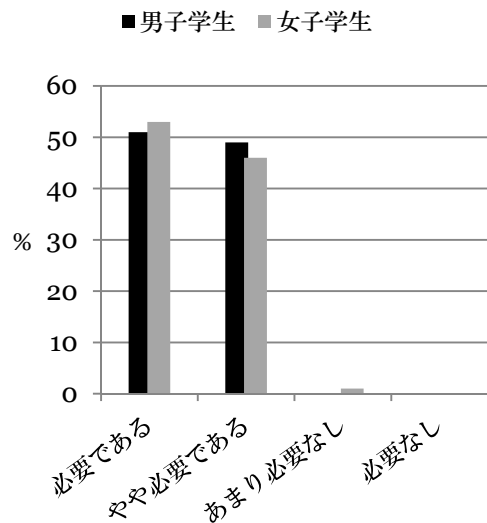


図6 伝承遊びの必要性に関する認識

2) 伝承遊びを子どもが体験する意義について、

子どもが伝承遊びを体験する意義について図7に示した。男子学生は「仲間意識を育てる」19%、「コミュニケーション力を育てる」17%、「楽しさを味う」16%であった。女子学生は「楽しさを味う」20%、「仲間意識を育てる」18%、「コミュニケーション力を育てる」17%の順に高かった。

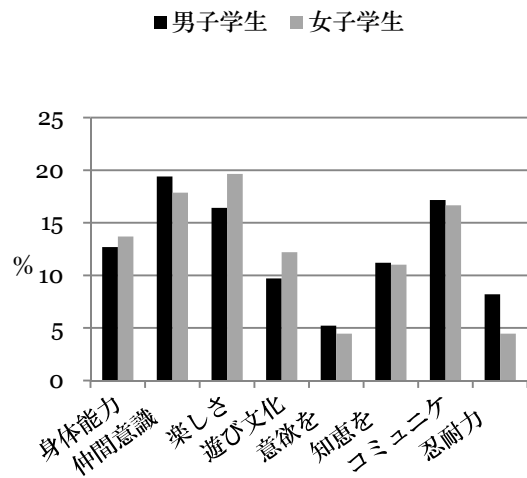


図7 伝承遊びの意義について

3) 伝承遊び体験時期についての認識

学生が伝承遊びを体験した時期については、男子学生は「小学生時代」51%、次いで「幼児期」49%であった。女子学生は「小学生時代」53%で「幼児期」47%であった。「中学時代」については皆無であった。男女学生とも幼児期と小学生時代に伝承遊びを体験していた。

4) 学生が伝承遊びを行った場所

学生が伝承遊びを行った場所について図8に示した。男子学生は「公園」「運動場」が26%で最も多く、次いで「園庭」13%の順であった。女子学生は「公園」26%、「小学校の運動場」24%、「園庭」18%の順であった。「海・山・川」で遊んだ者は10%程度で少数だった。「道路や神社」は男子学生が女子学生よりも多い傾向を示した。

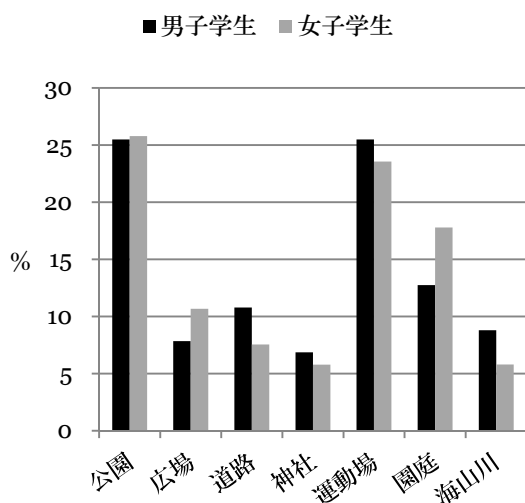


図8 学生が伝承遊びを行った場所

5) 伝承遊びを習った人（複数回答）について

学生が伝承遊びを習った人について図9に示した。男子学生は「友達」に習ったが74%で最も多く、次いで「園の先生」によるものが約51%、「小学校の先生」49%の順であった。女子学生は「園の保育者」が最も多く62%、次いで「友達」59%、「小学校の先生」51%の順であった。「母親から習った」のは男子学生では34%、女子学生は31%であった。「父親から習った」のは男子学生が26%、女子学生は16%であった。「祖母から習った」は男子学生が20%、女子学生は26%であった。

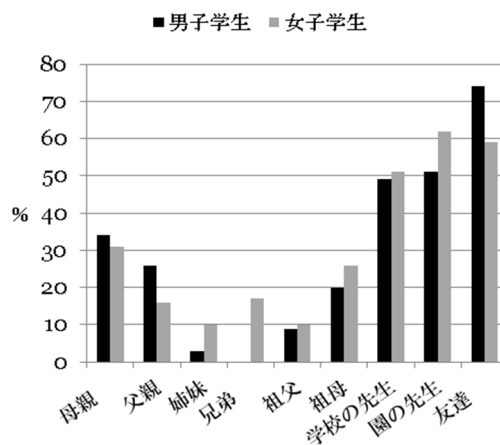


図9 学生が伝承遊びを習った人

6) 伝承遊びの指導に対する自信について

学生が保育者になった場合、伝承遊びの指導に対する自信について図10に示した。「何とも言えない」が男子学生は42.9%、女子学生は55.8%であった。「自信がある」と「やや自信がある」を合わせると男子学生は約40%、女子学生は23%だった。「やや自信がない」「自信がない」と回答したのは男子学生17%、女子学生は21%であった。男子学生の方が女子学生よりも自信を持っている傾向を示した。

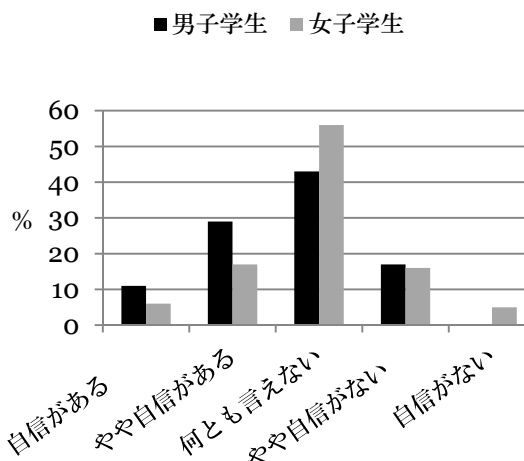


図10 学性の伝遊び指導の自信

7) 子どもに伝えたい伝承遊びベスト10

学生が子どもに伝えたい伝承遊びベスト10について図11・12に示した。男子学生が子どもに伝えたい伝承遊び上位は第1位が「ドロケイ」51%、第2位が「鬼ごっこ」46%、第3位が「かくれんぼ」40%であった。女子学生が子どもに伝えたい伝承遊びは、第1位が「はないちもんめ」40%、第2位は「ドロケイ」30%、第3位は「鬼ごっこ」29%の順であった。第一位の伝承遊びに男女差があった。

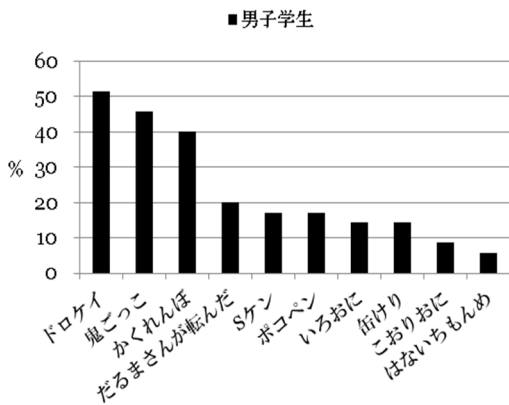


図 11 男子学生が子どもに伝えたい伝承遊び

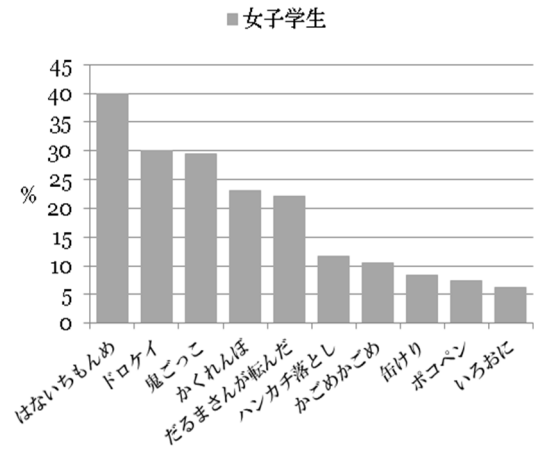


図 12 女子学生が子どもに伝えたい伝承遊び

8) 学生が遊んだことのある伝承遊びの男女比較

遊んだことのある伝承遊びの男女比較を図13に示した。女子学生の遊んだ比率の高い伝承遊びを左から順に並べた。歌やリズムを伴った遊びは女子学生の比率が高く、メンコやチャンバラごっこ、相撲などは男子の比率が高く、性差のあることが示されていた

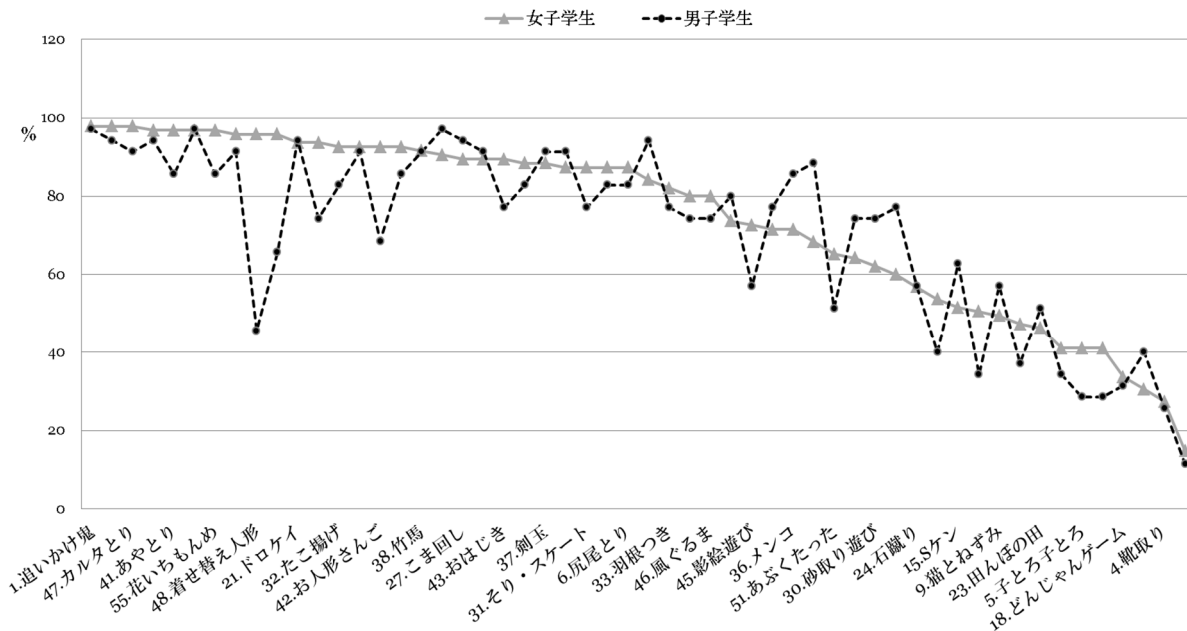


図 13 学生が遊んだ伝承遊び男女比較

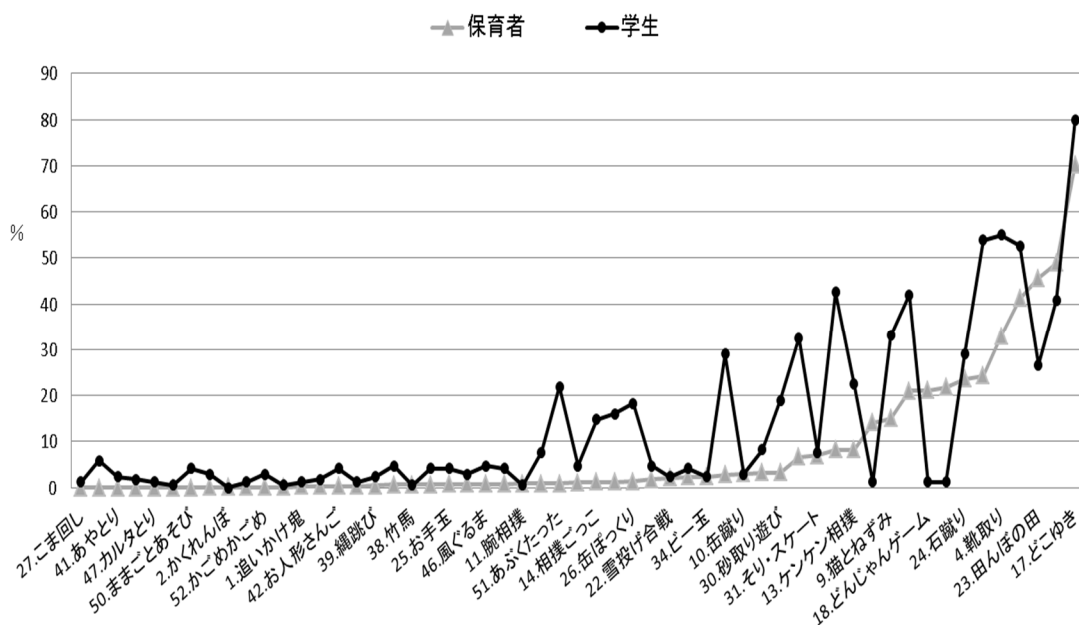


図 14 学生と保育者の知らない伝承遊びの比較

IV 考察

子どもたちの運動発達を規定する要因について。Gallahue DL(2002)は砂時計モデルを使って、遺伝要因を出生後に変えることは難しいが、環境要因を改善することによって子どもたちの運動発達が促されることを示した。

ここでは子どもの運動発達に関わる主要な環境要因について学生の認識と課題を検討した。

本研究の調査対象の学生は保育者を目指す学生たちであり、そのうち約 80%は東海地区の出身者であった。したがって、子どもの遊び環境の認識対象者も東海地区の子どもたちが中心であると言ってよい。

1) 子どもの外遊び時間と室内遊び時間に関する学生の認識について

子どもの遊び環境の要因として大切なものは三間と言われる遊び時間、空間、仲間である。それらの要因に関する学生のアンケート調査の結果は、自分たちの子ども時代に比較して現在の子どもの外遊び時間が減少していると認識していた。筆者ら(2012)の愛知県の子どもの生活習慣調査報告による母親の回答結果によれば、幼児の帰宅後の外遊び時間は、1999 年は 65 分であったのに対して 2009 年は 43 分となり 22 分間減少していた ($p < 0.001$)。また室内遊び時間は有意な差は認められなかった。外遊び時間の減少は、幼児の登園時刻が 12 分早まり、降園時刻が 45 分間遅く、その結果在園時間が長くなったことが原因であると推測された。したがって、学生は外遊び時間が減少し室内

遊び時間の相対的な増加を的確に認識しているといえよう。

2) 子どもの遊び友達数については、約半数の学生が「やや減少した」「減少した」と認識していた。また「あまり変わらない」も同程度の比率であった。「増加している」と認識していたのは少数の男子学生であった。筆者ら(2012)の調査報告では、1999 年は子どもの遊び友達が「いない」と回答した母親は 20%であったが、2009 年は 35%に増加した。また、三人以上の友達は 1999 年が 47%であったが、2009 年は 36%と約 10%の減少であった。近所の遊び友達の人数は有意な減少傾向が認められた ($p < 0.01$)。したがって、学生は子どもの遊び友達の減少傾向を的確に認識していたといえよう。

3) 子どもの遊び場所について学生は「減少した」「やや減少した」を合わせると約 80%だった。女子学生の「やや減少した」と「減少した」を合わせると約 82%だった。したがって学生は子どもの遊び場所について減少したと認識していた。遊び環境について仙田(2009)は朝日新聞(オピニオン)の子どもの劣化というテーマにおいて日本の子どもたちは「60 年間で自由で豊かなあそび環境を失っていった。日本の子どもたちの遊び場は昔から道が中心だった。しかし、道は自動車に奪われ、一気に子どもたちは多様な遊び空間を失っていった。そして、あそび時間を支配し始めたのがテレビである。1980 年代後半からテレビゲーム、近年ではパソコンや携帯電話などによって、子どもたち

は外で群れてあそぶ時間を分断されてしまった。」と述べている。筆者(2012)らの調査結果では6歳児のゲーム機保持者は70%以上に及んでいた、外遊びよりも室内の静的な遊びが増加している大きな要因となっているといえよう。

学生も自分たちの子ども時代より遊び場所が減少しているとの確に認識しているといえよう。

4)子どもの遊びにおけるリーダー的存在(ガキ大将)の人数について、男子学生の「減少した」「やや減少した」を合わせると約49%だった。女子学生は「減少した」「やや減少した」を合わせる58%だった。したがって子どものリーダー的存在(ガキ大将)の人数について過半数の学生が減少したとの確に認識していた。

1970年代頃までリーダー的存在であったガキ大将役が姿を見かけられなくなったとの指摘がされて久しい。子どもたちの集団遊びが豊かに展開するためには集団のリーダー的存在は欠かせない、現在ではその役割を保育者に求められているといっても差し支えない。子どもの遊び指導に保育者の力量が求められているといえよう。

5)子どもが伝承遊びを体験する意義について

伝承遊びを子どもが体験する意義について男子学生の大部分は「仲間意識」「楽しさ」「コミュニケーション」の回答が多いことから仲間意識を重視している。それに対して女子学生の大部分は「楽しさ」「遊び文化」「仲間意識」の回答が多かった。保育者は伝承遊びの意義は幼児の「成長や発達に有効である」「日本固有の文化に関心を持って、それを継承するため」と考えているものは80%以上であった。学生は伝承遊びによる「身体発達や成長」、および「遊び文化の継承」などの意義については意識していないようであった。学生と保育者の「伝承遊びの意義」について差が認められた。これは、学ぶ立場の学生と保育者の保育教材観との違いによるものと思われた。

中地万里子(1988)は伝承遊びの定義として、子ども社会の縦横のつながりと、大人から子どもへの経路を通して受け継がれてきた遊びの総称であると定義している。したがって、子ども社会のつながりと保護者、地域、園との連携は不可欠である。

6)学生が伝承遊びを体験した時期と場所について

伝承遊びを体験した時期について男女ともに幼児期と小学生時代であった。学生が伝承遊びを行った場所は男女とも「公園」が最も多く、次に「園庭・運動場」であった。そして学生が伝承遊びを習った人について上位から男子学生は「友達」「園の先生」「学校の先生」順が多かった。それに対して女子学生は「園の先生」「友達」「学校の先生」の順であった。家庭では両親の比率も高かった。

したがって、子どもの伝承遊びは園や運動場で保育者や小学校の先生のいる安全なスペースで展開されているといえよう。また、仙田満(2007)が主張するように、安全と安心を配慮した遊び場の環境整備は重要な課題であるといえよう。

7)伝承遊びの指導に対する自信について男子学生の「自信がある」と「やや自信がある」を合わせると40%だった。女子学生の「自信がある」「やや自信がある」を合わせると約23%だった。男子学生と女子学生の比較では男子学生の方が女子学生よりも指導の自信が高く、女子学生はあまり自信が無い回答が多かった。

筆者ら(2007)の伝承遊び全国調査でも20歳代の保育者は年上の保育者に比較して伝承遊び指導に自信がないと答えている者が多かった。したがって、学生の時期では当然の結果といえよう。

8)学生が遊んだことのある伝承遊びは、保育者よりやや少なかった。しかし、知らない遊びの数は図14に示したように、学生の方が保育者よりも多数を占めていた。伝承遊びの指導については自信が持てないようであり、養成校において指導スキルの習得が保育者としての力量形成につながると思われた。

半澤敏郎(1980)は子ども本来の姿を取り戻すため、昔から遊び込まれてきた伝承遊びの楽しさを今の子どもたちにも伝えていく大切さを主張している。

子どもたちは楽しさや面白さを体験することによって行動意欲が育ち、遊びが豊かになるにつれて楽しさも低次から高次なものへ高まっていく。これが子どもの好奇心を刺激し、創造的な活動を生み出すエネルギーとなる。そのためには幼児期から伝承遊びの楽しい体験がとても大切だといえる。全国のほとんどの保育園や幼稚園が伝承遊びを大切な保育教材として採用し実施している。したがって、保育者が伝承遊びをたくさん知っていて、その楽しさやおもしろさを子ども達に伝えていくことが大切である。保育者の伝承遊び指導の力量を高めるためにも伝承遊びに関する研修の機会を増やすことや養成校で学生に伝承遊びを十分指導するなどの要望に応じていく必要がある。

V まとめ

本研究の結果と考察は以下の様にまとめられる。

1. 保育者養成系学生の子どもの遊びに対する認識は、遊び時間、仲間、場所などの環境要因について学生自身の子どもの時代に比べて状態がやや悪化している。そして子どもの動的な外遊びが減少し静的遊び時間が増加していると現状をかなり正確に認識していた。
2. 子どもの伝承遊びの必要性については約 99%の学生が必要であると認識していた。しかし学生が保育者になった時、子どもに伝承遊びを指導する自信があるという学生は少数であった。
3. 伝承遊びの意義については、「仲間意識を育てる」「楽しさを味わう」であると認識していた。
4. 伝承遊びを体験したのは「幼児期」と「学童期」であった。そしてよく遊んでいた場所は「公園」と「小学校や園の運動場」であった。伝承遊びを教わった人に関しては、男子学生は「先生」と「友達」であり女子学生は「友達」と「園の保育者」が多かった。
5. 子どもに伝えたい伝承遊びについて、男子学生は子どもたちに活動性の高い伝承遊びを、女子学生は歌やリズムを伴った伝承遊びを伝えたいと思っていた。
6. 学生は多くの伝承遊びを体験していたが、保育者に比較して知らない遊びも多かった。そして、伝承遊びの指導にはまだ自信が持てないようであり、養成校において教材の意義や指導法の習得が保育者としての力量形成につながると思われた。

参考文献

- 穂丸武臣、丹羽孝、勅使千鶴（2007）日本における伝承遊びの実施状況と保育者の認識，名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』7号。
- 穂丸武臣、藤井勝紀、野中壽子（2011）愛知県における幼児の生活リズム・生活習慣・遊び環境の実態 報告書Ⅱ，子どもの発育発達研究会 p 55-83

- 穂丸武臣、渡邊琢也、勝田みな、渡邊明宏、斉藤典子（2012）幼児の生活リズムと生活習慣に関する年次比較 名古屋経営短期大学子ども学研究論集 4号 p 15-29
- GallahueDL(2002)UnderstandingMotorDevelopment:Infants, Children, Adolescents 5Ed. The McGraw-Hill
- 半澤敏郎（1980）童遊文化史 第1巻，東京書籍，東京。
- 正木健雄、野口三千三（1979）子どものからだは触まれている，白樹社。
- 正木健雄（1981）日本のこども・青年のからだの調査—乳幼児のからだ—アンケート報告書，日本体育大学研究所報，第6号，p1-11
- 中地 万里子（1988）伝承遊び，平山宗宏編 現代子ども大百科，中央法規，p 568
- 日本学術会議合同子どもの成育環境分科会（2008）我が国の子どもの成育環境の改善にむけて—成育空間の課題と提言—，日本学術会議，p 1-20
www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-t62-15.
- 日本学術会議合同子どもの成育環境分科会（2011）我が国の子どもの成育環境の改善にむけて—成育方法の課題と提言—，日本学術会議，p 1-77
www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t123-1.pdf
- 原田碩三（1982）幼児の運動能力の10年間の変化，保育の研究 3 p 40-47 保育研究所 草土文化
- 仙田満（2007）子どもを元気にする環境づくり，日本発育発達学会編，子どもと発育発達，Vol.5-2，杏林書院，p 62-65
- Von Bertalanffy(1978) 長野 敬，太田邦明昌，一般システム理論，みすず書房，p 36-38